

私にとって言語文化とは、「内言」の形作り・外言化の仕組である

自己立場を表明する表現交流の中から

張 珍華（ちゃん じんは）

1. はじめに - 自己表現の交流をもたらす「内言」を探ることから
2. 自己立場表明のために考えた「内言」の構造
3. 言語文化は自己立場の表明する中に存在する
4. 言語文化から考えられる言語教育の責任重大さ
5. 私の日本語教師像
 - 5-1 学習者の「内言」の形作りの促進剤としての教師
 - 5-2 何も与えないことに苦勞する教師
 - 5-3 学習者に自己表明の場とした教室を作る教師
6. 結論

*参考：「内言」「外言」「外言化」は言語文化研究の授業から得た概念で、本稿のキーワードになる言葉である。

1. はじめに - 自己表現の交流をもたらす「内言」を探ることから

言語文化研究の授業を受けてから、自分に新しい癖が付いてしまったことに気が付いた。

その癖とは、簡単にいうと、人と接する際の自分の姿勢の変化、言い換えれば、他者との接し方の変化である。極めて私という個人の問題ではあるが、授業を受ける前の私とは、他者の「外言化」される前の「内言」には全く関心がなかった。むしろ、分ろうとしては行けないものとして定義を出してしまい、私に他者とは「外言」とい

う形でしか存在せず、重要なのは「他者の外言」をどう受け止めるかという私自身の「場面認識」や「内言」であった。ここでの「場面認識」とは、他者の「内言」に関する思考抜きの認識である。

しかし、本授業の担当者である細川から「あなたは何が言いたいのか？」という質問を繰り返して受けて、広げられる人の「言いたいこと」を聞きながら、あるいは、私自身が言いながら、この質問の繰り返しとは、他者の「内言」を探るためのものであると分った。

そして、忍耐を必要とされる繰り返しとは、「外言」でしか他者に見せることが出来ない人間の内側にある思考の部分、つまり「内言」を分かち合おうと、伝え合おうとすることとも言える。そして、その繰り返しの果てには双方性を持つ自己立場の表明による自己表現の交流が成り立っていくことに気が付いた。又、このような双方性を持つ立場の表明による自己表現の交流のためには、「私の自己表現」・「私の立場表明」をしつつ、他者の立場を「受け入れる」「認める」ことが必要されると思われる。ここで言う「交流」のプロセスがコミュニケーションであり、「自己表現、自己表明、受け入れる、認める」というプロセスの中身となるものがコミュニケーションから追求すべきものではないだろうか、とおおげさのようだが、薄らと感じ始め、今は確信となった。

こんなふうを感じ始めたときから、自己立場の表明ができる表現のための「内言」とはどういう「内言」をいうのか、その「内言」を表現するための「外言」とはどうつくられるのかという疑問が生じるようになり、「外言で表現される他者の内言」に重点を置いて人と接する癖がついてしまった。その結果、他者には見えない部分である「内言」を他者に表現して見せることに言語の意義があるとみるようになり、私にとって言語文化とは言語を用いた内言の表現の仕方、つまり、言語を用いた内言の形作り、外言化の仕組そのものであると考えた。

下記は他者の内言の構造を出発点として、自己立場の表明できる表現に導く「内言」と、私が捉えている言語文化を詳しく述べた上、言語教育の役割から描ける日本語教師像を加えたものである。

2．自己立場表明のために考えた「内言」の構造

私は、他者の言語から、見えない部分である、かつて分ろうともしなかった「内

言」を覗き、その模様を描いてみた。そしたら、ヒキダシがいっぱい付いている大きなダンスの絵が一つ浮かんだ。そのダンスのヒキダシは、ローラーが付いているみたいに、すぐ引けるヒキダシと、引こうとすると重くて手が痛くなってしまうヒキダシという二種類のヒキダシを持ったダンスである。

内言のダンス	ローラー付きの引きやすいヒキダシ	重くて引きにくいヒキダシ
内容物	<ul style="list-style-type: none"> ・他者の言語をすでに味わったもの ・「情報」又は「知識」とも言えるもの ・はっきりとした形で変化がないもの 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者の言語を経験していないもの、 ・自分が言語化した経験が少ないもの ・自分にも良く見えなかったりするもの ・はっきりとしない形で、変化するもの
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐに引けるため、見せやすい ・自分だけのものではない ・共感していると感じやすい ・言語化したがる 	<ul style="list-style-type: none"> ・引きにくいいため、見せづらい ・自分だけのもの ・共感を得られることが少ない ・言語化したがない

ローラー付きのヒキダシの内容とは、表に書いてあるように、他者の外言そのままであったり、情報や知識と言えるもので、「内言主の思考の内容」が抜けている部分である。内言主の思考の内容とは他者と違う場合が多く、その内容がはっきりと「外言化」することが難しい場合もあるので、他者の共感を得るためには、「外言化」を繰り返しながら共感に近づく努力をする必要性がある。つまり、「内言」の部分には内言主しか知らない思考のみで構成されているのではなく、思考の部分とは言えない「内言」も存在することをこの表の引きやすいヒキダシを通じて明らかにしたかった点である。

そして、「外言化」することも上記の表の二種類のヒキダシの中から、どの種類の「内言」を引き出すかによって区別されるものであると思われる。知識と言えるようなローラー付きヒキダシの内容物を見せびらかすことによって、他者の共感を得ることとは、いつでも他者の言語通りに変わる、すなわち、智識を共有することであるとしか言えないことである。他者の言語や情報や知識を借りない限り、「外言化」は成り立たない極めて軽いものとも言えるだろう。

他者には見えない「内言」を他者に見せることとは、つまり、「外言化」することとは、どういうことだろうか。その「外言」が母語か母語ではないかは関係なく、自分の「内言」は自分にしか分からないものだったり、自分さえも曖昧に思えるものだった

たりする。しかし、自分の思考を他者に分ってもらうためのやりとりを怠らないこと
によって、他者との人間関係が深まっていくことが出来る。‘打ち明ける’‘信頼’
‘正直’‘親友’‘分かち合う’等の言葉も自分の「内言」を他者に見せる努力を行
ってからこそ味わえる言葉だと思われる。

このような、人間関係に深く関わる「内言」、つまり、他者には見えない、引きに
くいヒキダシの「内言」を「外言化」することが、自己表現するコミュニケーション、
自己立場の表明のためのコミュニケーションである。

3 . 言語文化は自己立場の表明する中に存在する

一人一人が持っているよく見えない部分を、他者に向けて表現したい場合、先ず、
自分がより見やすいように形作りをせざるを得ない。なぜなら、自分によく見えない
ものが、他者に見えるわけがないからである。ここで、一人一人の見えない部分であ
る「内言」を「私はこういう形だよ」と示すことが出来るように形作りをすること、
そして、形を他者に向けて見せるまでの仕組みそのものを私は文化であると考えてい
る。

その見えない部分とは、ローラーが付いているヒキダシから出したすぐ分る情報や
知識のような「内言」ではない。つまり、引きにくいヒキダシの「内言」であり、そ
の形とは思考と変化を繰り返す過程を経た後、ようやく得られた内言主だけの「形」
でなければならない。なぜなら、ヒキダシの持ち主だけの「形作り」の過程を経てか
ら得た「形」であるからこそ、他者にその形を見せる時の「見せ方」もヒキダシの内
容物と同じようにヒキダシの持ち主だけのもので、一つの文化であると考えているか
らである。

< 文化と考えている仕組み >

「内言」の形作り 確定なる「内言」の形を得る 他者に見せるための形作り
他者に向けた形の見せ方を得る 形の表明

また、その文化に接する際には、一概と「 であるもの」として早くもはっきり
とした形を決め、変化がないものにして、ローラー付きのヒキダシに締まってしまう
ことをしては行けないと思っている。他者に向けた「内言」の形を見せるまでに内言

主は幾度も思考を繰り返している。しかし、見せられる側に立った他者とは、見せる側の内言主の文化、つまり、形の表明までの仕組みを一度で読み取るとはなかなか難しい。誰もだ分かるような見せ方ができる内言主であれば話は変わってくるが、それもなかなか難しく思われる。すなわち、文化とは、引きにくいヒキダシの「内言」から出発して形作りから得たもので、それに接する側にも新たな文化の生成を要求する、もたらさざるを得ないものであると、私は考えている。

逆に、すぐに見せたがるローラー付きのヒキダシの中身を見せる場合は、自分だけのものではないため、文化ではなく、見る価値のない、ない方がマシなもので、見せている内言主は存在していないことに等しくなる。

つまり、文化とは、重いヒキダシの中にある自分だけの「内言」を形作る仕組みそのものである。そして、文化の見せ方に言語を用いた場合も同じく、上記の「私の内言はこういう形だよと示す」こと、即ち、「外言化する」ことにまでの仕組みが言語文化で、それは 2. で述べた自己立場を表明するコミュニケーションの中で私たちは自己または他者の言語文化を味わうことができると思われる。

< 言語文化と考えている仕組み >

引きにくいヒキダシの内言から出発 内言主が確信を持つための内言の形作り
共感や外言化のための内言の形作り 外言化

4 . 言語文化から考えられる言語教育の責任重大さ

上記の 2 と 3 から私が考える言語文化とは、他者に向けて表現するための「内言」の形作りということになる。形作りをしてない「内言」とは、自分を表わすことが出来ないもので、自分を現わすためには、自分だけの言語文化を持つ人間になるように「内言」の変化を恐れてはいけない。カメレオンのように、自分の保護色ばかりを求めては、「カメレオンの皮膚は、本当は何色でしょう？」というクイズの餌のような人間、本当の姿は誰も知らない人間にしかねないのではないだろうか。いつ、どのような場面に立っても自分の言語文化、「内言」の形作りが明らかに見える人間こそ、自分の存在を実感しながら、他者にも自分の存在感を感じさせられることになると言えるのではないだろうか。

物事を常に「～のような理由で、私には、 が である」とはっきり言えるように、

内言の形作りを繰り返すことから出来る自己立場の表明から人間関係を深めていくことが出来ると思われる。

このような私が考える「言語文化」を元に「言語を教えること」について考えてみると、教師は学習者の人生の中で欠かせない人間関係に深く関わっていることが分り、その責任はとても重大なことであることが分った。そのため、言語を教える教師は言語規則を教えるだけに止まらず、自分をしっかりと表わせることばを見つけられるように学習者を導くことに重点を置くべきではないだろうか。

私の思う導き方とは、すごく単純に思える可能性があるが、言語規則を重要視しすぎて学習者の言葉の訂正を繰り返すことをするのではなくて、ただ、「学習者に自分の立場を教室のみんなにちゃんと伝わるような言葉で言わせる」ことではないかと思っている。

それから、私は、言語文化研究のメーリングリストからのメール内容で日本語教師の経験から出る話を聞くことが出来た。その体験と自分の言語文化に関する視点を加えて日本語教師像を描いてみたいと思う。

5．私の日本語教師像

5-1 学習者の「内言」の形作りの促進剤としての教師

学習者の日本語から感じる違和感

- 大学院生 M のメールから（日付や内容が正確ではない）

日本語学習者の文法的な間違いから、教師又は母語話者が感じる違和感というのは、どこから来るものだろうか。私は、「外言化」されたものの「形」だけを見る教師又は母語話者の言語文化観が違和感をもたらしたのではないだろうかと思われる。

文法的な間違いに重点を置く教師の違和感は自然に学習者にも伝わるようになる。（学習者の立場の私の経験から）そうすると、学習者は教師に違和感を与えることをさけるため、文法的な自信のない学習者は「本当の言いたいこと」より、文法を正しく使えるものだけを言語化するようになり、それが本当に自分の言いたいことだという、「ウソの自分」を教室の中ではつくってしまう。「ウソの自分」は、正しい文法の言語化を一番価値ある言語だと思うため、必ず、他者（主に日本語の先生）の言語化を経験したものをそのままマネするような形の言語化しか出来なくなる。自分だけのものの存在を隠させるような教師ではなくて、学習者が「本当に言いたいこと」の形が作れるような能力を促進させ

る促進剤の役割をする者が教師ではないだろうか。

5-2 何も与えないことに苦勞する教師

学習者に与える，教える内容について

- 大学院生 T のメール：10月2日

* 「日本人はこういう社会だ」とか「日本人は だから，こういう表現をよく使う」という説明は教師にとっても，学習者にとっても，わかりやすく，お互い楽ですし，実際，私も時々使ってきたやり方です。

** ことばや文化を知るためには，その社会にどっぷり入るのが，一番いい方法だと，自分の経験から思います。ただ，対象となっている文化を理解するために必要なのは，おかしなようですが，自分が持っている文化ではないでしょうか。

- 大学院生 E のメール：10月2日

* 同僚の若者の言葉を理解したい。自分の言葉はどうやら丁寧すぎるらしい。

連絡帳の書き方がわからない。先生は間違えていても直してくれない。学会できちんと日本語で話したい。

大学院生 T・M のメールの * 部分から，何でも早く教えてくれる教師とは，ローラー付きのヒキダシの中身をふやすためのものを教える人ではないだろうかと感じた。

つまり，** でいう「自分が持っている文化」をつくりあげるために教師が与えるべきものとは何かを考えさせられた。それは，学習者に「自分自身が何をどう表現したか」について「とっぷり」と考えさせることを与えることしかないのではないだろうか。一定の形として，別の形とは考えられないというような教師の言語文化を押し付けることは，学習者の言語文化の停止をもたらし，学習者の人生から自己表現のチャンスを奪ってしまう，極めて危険な行為である。

つまり，「教師は学習者に何も与えない，そのため，学習者は考える」，お互い敢えて苦勞をする，つまり，教師は学習者に情報や知識なるものを与えたい気持ちを我慢する苦勞，学習者の「内言」の形作りのための苦勞を，敢えてお互い苦勞することによって，「自分の本当の言いたいこと」を探し，形作りが出来るようになると思っている。

5-3 学習者に自己表明の場とした教室を作る教師

「ことばが生きている」ことから

- 大学院生 P のメール：11月27日

文集を読んだ感想は、やはり、「ことばが生きている」ということです。誤字や文法的な間違いはあっても、充分コミュニケーションをはかる文になっていたし、「自分の考え」が「自分のことば」表現されていたと思います。

学習者一人一人から自己の立場を表明したいという意思を感じる事が出来たから、大学院生 P は文集から「ことばが生きている」と言っているのではないだろうか。

まさに、ことばが生きて飛び交っている教室を作ること、学習者一人一人が自分の立場を表明しつつ、他の学習者の立場を認める教室を教師が作ることが、日本語教室の理想像ではないだろうかと思った。

6 . 結 論

私は「他者の外言化される内言」を出発点として、言語文化とは「内言の形作り」・「外言化の仕組み」であるし、言語教育や日本語教師像の基準になるべきだと述べてきた。

そして、「内言」の構造を描いてみることでは、ヒキダシの形を用いて説明を試みた。その中身とは、情報や知識、他者の言葉と言え部分と、他者にはその内容が良く見えない自分だけの思考の言葉と言え部分で、大きく二つに分けられる。このような二つに分けて考えた「内言」の中で、他者に自分を表わすことが出来、且つ人間関係に大きい関わりを持つと言え部分とは、ヒキダシの中身の後者の部分、つまり、他者には見えない自分だけの思考の言葉と言え部分であると思われる。すべての場面でこのような部分の「内言」を他者に表わす必要があると一概には言えないが、「外言化」したものが自分を表わすことが出来て、さらに、人間関係にもつながる「外言」によるコミュニケーションとは、双方性を持つ立場の表明による自己表現の交流とも言えるのではないだろうか。

そして、私は言語教育の目的を考える際に、そして、日本語教師像を描く際に、上記の「自己立場の表明」と思うコミュニケーションを軸として、言語教育とは学習者に自己立場の表明する表現の交流を味わえるための能力を養うことに目的を置くべきであると述べた。単に知識や情報を与えることは学習者一人一人が必要によって言語

教育を通じなくても行えることである。そのため、言語教育の場では重くて引きにくいヒキダシの部分を表現してみることを繰り返していく場として活用すべきではないだろうか。そうすることによって、学習者自らの思考の部分を明確にしていくことと、学習者一人一人の内側にある自分の思考の部分を表現することが出来るという教育効果が得られると思われる。

重くて引きにくいヒキダシの思考の部分を表現するための「内言の形作り」・「外言化の仕組み」こそが、私が捉えている「言語文化」である。

言語教育において重要なことは、言語教育に携わる教師一人一人が言語文化をどう捉えるかによって言語教育効果が違ってくると思われる。なぜなら、その教室で交わされる言葉が引きやすいヒキダシの「内言」なのか、引きにくいヒキダシの「内言」なのかによって、学習者への教育効果とは180度が変わってくるわけだからである。

すなわち、教師が教室で学習者に知識や情報をたくさん与えることによって、学習者の引きやすいヒキダシの内容物を増やすことをするか、学習者が引きにくいヒキダシの思考を表現することによって、学習者一人一人を「外言化」の仕組みの体得の道へ導くことをするかは、言語教育に携わる教師が言語文化をどう捉えるかと直結することで、立場を明らかにすべきであると私は考えている。